

東川節度使楊汝士を指す。○鐵馬 鐵甲を着けた騎馬。○少傅 太子少傅であった白居易を指す。○步銅駝 「銅駝」は銅製の駱駝。になって「銅駝を歩す」という形になつてゐるが、實際には白居易が「銅駝街を歩む」という意味である。○憐 慕う。愛する。○高情 (ひ)と女蘿 (じよ)。隱者の身にまとうかずら。転じて隱遁すること。『楚辭』九歌「山鬼」に「人、山の阿 (ゑ)に有るが若し。薜荔を扱 (と)い、女蘿を帶す」とあるのに拠る。また『文選』卷二十一、謝靈運「從二斤竹洞越嶺溪行」詩に「山阿の人を想見するに、薜蘿眼に在るが若し」と。○懸車 車を掛けて用いないことを示す。官職を退くこと。「懸車の年」は致仕(定年)の年。七十歳。後漢の班固『白虎通』卷二下、致仕に「臣は、年七十、懸車致仕する者なり」と。○放 そのまま放つておく。……させる。當時の俗語。

335

分司洛中多暇數與諸客宴遊醉後狂吟偶成三十韻因招夢得賓客兼呈思黯奇章公

解題 開成二年(八三七)の作。太子少傅分司として洛陽に在り、暇にまかせてしばしば友人たちと宴遊し、醉後たまたま二十句十韻の詩を作り上げた。その際、太子賓客分司の劉禹錫(夢得)を招き、兼ねて牛僧孺(思黯)に呈した詩。敬宗が即位した時に牛僧孺は奇章宮食邑二千戸となり、東都尚書省事・東都留守を判していた(『旧唐書』卷一七二・牛僧孺伝)。

性與時相遠身將世兩忘性と時とは相遠く、身と世とは兩つながら忘る。

寄名朝士籍寓興少年場名を朝士の籍に寄するも、興は少年の場に寓す。

老豈無談笑貧猶有酒漿老なるも豈に談笑無からんや、貧しきも猶ほ酒漿有り。

隨時求伴侶逐日用風光
數數遊何爽些些病未妨天教榮啓樂一人怨接輿狂改業爲逋客移家住醉鄉不論招夢得兼擬誘奇章要路風波險權門市井忙
世間無可戀不是不思量忘場漿妨狂鄉量(下平聲陽韻)光忙(下平聲唐韻)……陽唐韻是用同用。

通釈 私は、生まれつきの性格として御時勢とは縁遠く、立身も出世もどちらも忘れてしまつた。たしかに我が名前は朝官の名簿にのつてはいるが、我が興する所は青春の狂瀾。老いたからといって仲間と楽しく語り合うことが無くなるわけでもなく、貧しいといつても酒くらいはある。氣のむくままに連れをみつけ、風光を楽しみながら日々をくらしている。数を重ねる遊興は私の気持ちにぴったりだし、いさかの病くらいでこの楽しみは妨げられたことはない。天が榮啓期に生まれながらの楽しみを与え、人が接輿の佯狂を怨したように、私居易は気ままに楽しみ、酔うて狂吟するのである。業を改めて隠者になろう。家を移して醉郷に住まおう。劉禹錫を招くのはもちろん、牛公奇章も誘うことにしてよう。要職につければそれだけいざこぎが多く、権門におれば俗事に多忙なものだ。そんな世の中には恋いしたうべきものなど無いということを、(彼等とて)考慮していないわけでもないだらう。

詰釈 ○身将世両忘「身・世」は、この身とこの世。『文選』卷二十一、南朝宋の鮑照「詠史詩」に「君平独り寂寞として、身と世と両つながら相(あひ)棄つ」とあるのによる。「將」は、並列を表す接続詞「与」と同義。○少年場 血氣盛んな若者たちの活躍する舞台。業府題に「結客少年場行」あり。○數數たびたび。何度も。○榮啓 古の隠者榮啓期。孔子の問いに対しても、自分は人間であり、男と